

令和8年度特別展

## 「福井の昭和「百年」史」

2026年(令和8)は、昭和の時代が始まってから満100年を迎える年です。昭和は大正天皇の崩御に伴って裕仁皇太子(昭和天皇)が践祚<sup>せんそ</sup>したことで、1926年(昭和元)12月25日に幕を開け、昭和天皇の崩御により改元された1989年(昭和64)1月7日まで続きます。この62年間は、国際社会での日本の立ち位置や国内の政治体制、技術の発達や社会の構造の変化を背景にした生活のあり方などが大きく変化した時代でした。そしてこれらの変化は、福井県内で暮らす人びとにも大きな影響を与えました。

昭和の頃に確立した価値観や生活様式などは、昭和が終わって約40年が経った今日、職場や学校、家庭などの場で見直しを迫られ少しずつ姿を消しつつあります。一方で、昭和の頃の生活や社会のありようを懐かしく思ったり、当時の価値観を重視する立場の人びとも多くおり、賛成と反対の双方の立場から議論がなされることもあります。その点では、昭和は終焉とともに過去のものになったのではなく、極めて今日的な存在であると言えます。

特別展「福井の昭和「百年」史」では、昭和の始まりから福井地震までを前期(8月1日(土)～9月6日(日))、戦後の復興から令和の今日までを後期(9月12日(土)～10月12日(月・祝))として、この100年間で資料とともに振り返ります。100年の歴史を振り返る場合、視点は多岐にわたりますが、今回の展示では主に福井県民の生活という視点を中心に据え、私たちの生活に大きな変化をもたらした出来事をピックアップして詳しく取り上げていきたいと思っています。私たちが生きている現在はどういうように築かれてきたのか、そしてこれから私たちはどこへ向かうのかということを考え、次の100年へのスタートを切るきっかけになることを目指します。

### 1. 昭和のはじまり

大正天皇の病状が悪化し、崩御したのは1926年(大正15)12月25日でした。裕仁皇太子はただちに践祚し、この日、昭和の幕が開きます。その後、大正天皇の喪が明けた1928年(昭和3)11月10日に、京都において昭和天皇の即位の儀式である大典が行われました。この大典に伴って行われた宴会である「大饗」には、福井県選出の国会議員や県内の有力者も参加しました。また、大典にあたっては全国各地で数々の記念事業が行われました。こうした記念事業を通じて、新しい昭和という時代が人びとの間に浸透していったのです。

### 2. 不況と都市文化

昭和初期、東京や大阪などの大都市で発展した都市文化が福井の地まで及びました。観光の盛り上がりを背景に、1935年(昭和10)4月には福井観光協会が結成されました。1927年には、現在の西武福井店の前身である「だるま屋百貨店」が開業し、少女たちからなる「だるま屋少女歌劇」が結成されます。また、この時期には福井県内でそれまでの絹織物に代わって人造絹糸(人絹)が作られるようになります。福井市場は一時全国の人絹糸の標準相場を



少女歌劇タイムス

決定する市場となり、1932年4月に世界最初の人絹取引所が開設されるなど、「人絹王国」と呼ばれました。政治の面では1925年には、男子に限定されてはいましたが納税などの条件が付されない普通選挙制度が始まりました。選挙が一般的になると、違反のない公正な選挙が課題となり、選挙粛正のビラが刷られました。

一方で、1929年のアメリカ・ニューヨーク市場での株の

大暴落を契機とした世界恐慌は、福井県内にも影響を及ぼしました。こうした不況にあえぐ国内の状況を打開しようと、次第に産業の統制や心身の錬磨が模索されるようになります。また、福井県は、戦前に結核患者を多く抱える「結核県」として有名であったため、結核の予防をはじめとした健康な身体の育成が課題となりました。



選挙粛清ビラ

### 3. 戦争・震災の時代

1931年(昭和6)に満洲事変が、1937年に日中戦争が起こるなかで、地域の人に見送られて県内の若者は次々と軍人として戦地に向かっていきました。軍事郵便や慰問品がこうした出征者と地域の人びとを結びつけました。日中戦争が始まると、戦争最優先で物資を分配するため、切符制が導入されるなど、地域に暮らす人びとの生活にも影響が出てくるようになります。ほしい商品が購入できないだけでなく、家庭内の金属製品も買い上げや供出に応じるように求められるようになりました。そして、戦争の拡大によって戦死者や戦地で病気にかかり亡くなる人も急増します。

戦争の末期になると、日本各地が空襲の対象となり、国内であっても戦場とかわらない状況になりました。都市全体で灯火を抑制し、空襲の目標とならないようにするなどの対策が取られましたが効果は薄く、1945年7月12日に敦賀市が、19日には福井市が空襲を受け、多くの人びとが亡くなりました。

1945年の夏に戦争が終わりましたが、復興に歩み出した人びとを大地震が襲います。1948年6月28日に起こった福井地震です。この地震により、嶺北北部の機能は麻痺し、各地の復興計画は一からの見直しを迫られますが、1952年には、「福井復興博覧会」が開催されました。



健康週間貼紙



防空電球



集束焼夷弾 M69

## 4. 復興に向けて

敗戦によって、それまで戦地に行っていた人や朝鮮半島などの植民地などで暮らしていた人が国内に帰ってきました。また空襲によって生活基盤を失った人もおり、こうした人びとがどのように生活していくのが問題となりました。その解決策の1つが開墾がされていない土地への入植です。ここでは戦後の開拓地に生きた人びとの資料を展示し、終戦直後の生活を見ていきます。また、敗戦によって、それまでの統治システムが揺らいだこともあり、青年層の活動が活発化します。彼らはサークルで発行した文芸誌や演劇の台本を通じて、自分なりの新しい日本の建設を叫び、自己の内面を表現していきました。

## 5. 高度成長と福井

高度成長期は生活が大きく変わった歴史的な転換期でした。この時期に急速に家庭の電化が進み、可処分所得の増加は消費活動の性格を変えました。特に情報を伝えるメディアがそれまでのラジオや映画からテレビへと変わり、世界で起こる出来事が瞬時に家で見られるようになりました。また、生活の電化はエネルギー確保を目的とした開発や発電所の建設に繋がっていきます。個人の消費活動も、個人経営の商店での買い物からショッピングセンターなどの大規模店での買い物に変わっていきます。経済成長による経済活動の活発化は大型の建築物を県内に出現させました。

## 6. 昭和の終わりと平成・令和

1989年(昭和64)1月7日に昭和天皇が崩御し、激動の昭和は幕を閉じます。ここでは、その後の私たちの生活の変遷を追っていきます。平成期に福井県で起きた大きな出来事として1997年(平成9)のロシアタンカー重油流出事故が挙げられます。島根県隠岐島沖で座礁したタンカーの船首部分が三国町(現 坂井市)の安島付近に漂着し、タンカーから漏れ出た大量の重油が沿岸の各地に流れ着きました。この出来事はテレビでも報道され、全国から多くのボランティアが重油の回収に訪れました。現地では、各地から集ったボランティア同士のつながりが深まるなど、この2年前に起こった阪神・淡路大震災と並んで日本へのボランティア文化の定着を象徴する出来事になりました。この時に情報発信のツールとして活用されたのがインターネットです。作業の有無などがネットで逐一伝えられたことは、ネット時代の幕開けを告げました。

昭和の末期に古生物の化石が勝山で発見されたことから、県では数次の発掘調査を行いました。この結果をもとに県立博物館の自然科学分野が独立し、恐竜博物館が2000年に開館します。恐竜エキスポも開催され、福井県を挙げて恐竜が売り出されていきます。

その後、2019年には平成が終わり、令和と改元されます。令和期に起こった新型コロナウイルスの蔓延や米不足など、今日に至るまでの出来事も収集した資料を基に振り返っていきます。

### トピック カラーでよみがえる写真に写された日常

近年、デジタル化の進展に伴って、古写真や映像に着色し、当時の色彩を再現する技術が発達してきました。当館では、本展示の開催にあたってNHKエデュケーショナル、NHKアートと協力し、館蔵の古写真をカラー化しました。モノクロだと分からない細部が鮮やかに浮かび上がり、遠い昔の人がまるで現代の人のように生き生きと捉えられます。展示資料と合わせてぜひご覧ください。

令和3年度より、福井新聞に福井県の文化施設の職員が寄稿しています。福井県立歴史博物館の学芸員は、新聞に掲載される「歴史の扉」欄で、日々の調査の中での発見や展覧会の見どころなどを執筆しています。福井新聞社より「歴史の扉」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「歴史の扉」をご紹介します。

令和7年(2025年)8月2日(土曜日)



みなさんは、やさしいの「正しく」とのようなのを思い浮かべますか？

食べ物や花を盛り付ける食器や、花を飾る花瓶、この時期なら風鈴を思い浮かべる人もいるかもしれません。ほかにも、家電やスマートフォンなどの部品にも

やきもの時代、地域で特徴とく ちやう

大甕 越前窯(16世紀) —  
國立歷史博物館藏

ファイネセラミックスとしてやきものが使われています。今回は、人の生活にやきものがどのように関わってきたか時代を追いつながって紹介します。やきものが初めて作られたのは縄文時代です。縄文人はやきものを食料の貯蔵に使ったり調理に使ったりしていました。また、土偶は安産や豊

かな束りを折ったものだと考えられています。折りの場で使われたやきものとしては、古墳時代からの土器は、古墳時代のは、埴輪が有名です。

堀井県内では人の形をした埴輪は少なく、円筒埴輪と呼ばれる少くは円状埴輪の埴輪が多く見つかっています。円筒埴輪は古墳の上や周囲に置かれ、古墳を装飾したほか古墳を聖域化

として他と区別するため  
に置かれたと考えられて  
います。また、古墳からは  
副葬品として、酒器や呼  
ばれる黒いやきものが見  
つかることがあります。そ  
れらの中には、変わった  
形をしているものもあり  
、死者をうつ儀式に使  
われたと考えられていま  
す。

平安時代の終わりに  
、越前町内で越前焼が  
作られるようになりまし  
た。越前焼は室町時代の  
後半に北海道から鳥根製  
までの日本海側の各地  
や、長野県や福島県でも  
使われていました。江戸  
時代になると、徳利や仏  
花器なども生産するよう



一瀬諒学芸員

明治時代に入ると、県内各地でいろいろな特徴をもつやきものが生み出されるようになりまし。福井県内では珍しい磁器を生産していた菱岡、アメリカへの輸出を目指して京焼や九谷焼風の絵付けをしていた日沙園、手の込んだ日用品を生産していた新山焼など、多種多様なやきも

のが作られるようになった。現在も数多くの作家が、それぞれの特技や持ち味をいかした磁器焼を作っている。

現在、福井県立歴史博物館では、特別展「越前・若狭・やきもの旅」を開催している。8月31日まで開催しています。県内で縄文時代から現在までに作られ、使われてきたやきものが展示されています。ぜひお越しください。

© 福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和7年(2025年)11月1日(土曜日)



福井県立歴史博物館で開催中の秋季特別展「越前・若狭 異国との出会い」では、奈良・平安時代における越前・若狭と外国との交流をテーマとされています。ここでは、展示内容の一部をご紹介します。

# 外国との交流の窓口



続日本紀(興立歴史博物館所蔵)

海といふ國が、  
世紀後半から  
まで、現在の  
北朝鮮の  
一部、ロシ  
ア沿海州  
にかけて存  
在しまし  
た。當時の  
日本とも國  
家使館の往  
來があり、  
神龜4年  
（727年）  
から延長  
4年（92  
6年）まで、  
渤海からの  
使節（以下、  
渤海使）は34回、日本か  
らの使節は13回派遣され  
ました。  
渤海使は、日本海沿岸  
の港に現れることが多  
く、北陸にも十數回來航  
しました。また、來航し  
たのちに、都に招かれる  
こともあったため、北陸  
を通行したり、滞在した  
りすることもありました。  
越前國の港としてまず  
挙げられるのが敦賀津で  
す。ここには、松原客館  
という施設が置かれ、外国  
からの來客をもてなす迎  
賓館としての役割を果た  
していたと考えられます。  
次に挙げられるのが三  
國津です。奈良時代の



今回の寄稿は……  
酒井健治さん  
(文化財調査員・歴史学)

これは、二国海が歴史  
 上初めて登場する記事で  
 もあります。

教習と二国は、ともに江  
 戸時代の北前船の寄港地  
 として有名ですが、すでに  
 奈良・平安時代において  
 は、外国との交流の窓口と  
 して登場していたのです。

特別展「越前・若狭  
 異国との出会い」は、11  
 月24日（月）振替休休  
 日）まで開催しております。  
 この機会にぜひご来  
 館ください。

© 福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和 8 年(2026年) 3 月21日(土曜日)

令和 8 年(2026年) 5 月30日(土曜日)

人は亡くなった後、どこへ行くのでしょうか。日本では、古くは仏教の教えによって、人々は極楽の世界に生まれ変わりたいと願っていました。こうして極楽の主である阿弥陀という仏さまの像があらわされるよ



## 阿弥陀さま 髪で刺繍



寺外初公開となる刺繍種子阿弥陀三尊図(福井市の西光寺蔵)

うになります。福井の地にも数多く伝わっています。そのうち今回紹介するのは、福井市の西光寺に伝わる絵「写真」です。一見すると阿弥陀さまは描かれていないように思えますが、実は中央

にある黒色の文字「そが」が阿弥陀さまの姿なのです。種子という梵字「文字で仏さまを象徴しています。阿弥陀さまの種子はキリクと読みます。その左右には観音・勢至という菩薩の種子「サ・サク」があらわされています。

注目すべきは、この3文字が人の髪の毛で縫いあらわされているということです。糸で刺繍された周りの花や鳥などの箇所とは違って、これらの文字には艶がありません。かつては死後が安ら

かなものであるようにと願った人の髪の毛や、大切な人の遺髪を用いて、刺繍をすることがありました。さらに絵の左右の下には、脚の前で手を合わせる女性2名があらわされています。極楽の世界に生まれ変わること願った人でしょうか。この絵が描かれたのは、6〜700年前(南北朝・室町時代)にかけてのことです。このように絵をじっ



今回の寄稿は…  
高口柚学委員  
(美術工芸)

天下統一を成し遂げた豊臣秀吉と秀長の兄弟。いま、彼らが駆け抜けた時代に注目が集まっています。それでは、その時代の越前にはどのような人がいたのでしょうか。まず思い浮かぶのは、秀吉のライバル、柴田勝



## 秀吉の従弟 北庄城主に



家です。ね。今年の春、3回目となる北庄勝家行が福井市の柴田神社・西光寺で開催され、勝家の認知度も年々高まっているように思います。しかしながら、勝家亡き後の北庄城主となる、徳川時代の結城秀康は知っているが、それ以前の人物は知らないという人も多いかもしれません。今回は、そんな「地味」な北庄城主の一人、青木重吉(一矩)をとります。最新の研究によれば、秀吉の父方の妹(叔母)の子で、

秀吉よりも年下と推定されています。つまり、秀吉の従弟ですね。はじめは秀吉に仕え、紀伊国で城主となりました。その後、秀吉の家臣となり、さまざまな合戦に参加し、越前の大野城、府中城などの城主を務めました。越前にゆかりの深い人物なのです。そして、慶長4年(1599)2月5日、北庄城主に任命されました。これは、当時の豊臣政権の最高幹部である五大老(徳川家康、前田利家など)が、すでに亡くなっていた秀吉の遺命として指示したものです。死期



今回の寄稿は…  
大河内勇介学委員  
(日本中世史)

福井県立歴史博物館の学芸員は令和8年度より日刊県民福井の「おいでよ」欄で、日々の調査の中での発見や展示会の見どころなどを執筆しています。日刊県民福井より「おいでよ」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「おいでよ」をご紹介します。

令和8年(2026年)4月21日(火曜日)

[illegible]

©中日新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和8年(2026年)6月9日(火曜日)

[illegible]

©中日新聞社 無断複製・転載を禁じます

# 「あなたが見つけた街かどの昭和」

1926年12月に昭和が始まってから今年で100年、1989年1月に昭和が終わってからは38年という長い時が流れ、人々の記憶の中からも、人々の暮らす街中からも昭和の面影は姿を消しつつあります。

昭和100年という節目の今年、県民のみなさまに改めて「昭和」について思いを馳せ、過去と現在との暮らしや街中、身の回りの変化について発見していただきたく思い、現在福井県立歴史博物館では公募写真展「あなたが見つけた街かどの昭和」を開催しています。

写真展では、県内外の方からひろく「福井県の街かど」に残る昭和の面影の写真を募集し、期間中は随時展示に追加しています。

この紙面では現時点で応募・展示されている作品38点のなかから4点をご紹介します。

また見どころとして、被写体に対する思い出や好きなポイントなどについても応募時にコメントをつけていただくことで、昭和を経験してきた年代の方々は「昭和」を回想していただき、昭和を実際には経験したことがない年代の方々は「どのようなものに昭和を感じているのか」を語っていただいております。



「街中に残る木製電柱」

(福井市花月4丁目、2023年3月2日撮影)  
なかじい(21歳)

「昭和期には多く存在していたであろう木製電柱が、街中にひっそりと佇んでいました。コンクリート製の電柱へ変わり、さらには無電柱化も進む現代ですが、この電柱は新しい地区名表示板も付けられ、現役バリバリのようです。安全面から撤去が進んでいそうですが、これからも地域を見守っていてほしいものです。」

公募写真展を通して、様々な年代の方々にとっての「昭和」観を浮き彫りにし、改めて「福井県の昭和」について考える機会としていただけましたら幸いです。

みなさまからのご応募をお待ちしております。

## ●開催期間

10月12日(月・祝)まで

## ●募集期間

8月31日(月)まで

## ●場所

歴史博物館 1階 エントランスギャラリー

## ●募集要項について

詳細は博物館HP

<https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/info/20260515syasin.html>



「道にある水門」

(旧南条町関ヶ鼻、2026年5月25日撮影)  
宮川和廣(54歳)

「子供の頃道草で通った道で水門が落ちてこないか恐る恐る通ってました。50年近く過ぎた今でも落ちていません(笑)川があったのか護岸の石垣が残っています。誰に聞いても川があったことは確認できていません。」



### 「辻に立つ 赤いポストと 石ぼとけ」

(福井市上野町、2026年5月9日撮影)

胡瓜猫

「赤いポストと笏谷石の地蔵が、辻を見守るように立っています。いつも車で通過するときに、ふと印象に残る場所です。」



### 「ハサイニュウ」

(坂井町(現坂井市)、2026年5月5日撮影)

イトウ(32歳)

「田んぼの中や集落に、たまに横に細長い小屋があります。今年90歳になる祖母に聞いたところ、これは「ハサイニュウ」といい、稲架掛け(ハサガケ)に用いる木や竹を入れる小屋だそうです。かつてはいたるところにあったようですが、圃場整備やコンバイン普及に伴い(昭和40～60年頃)なくなっていったそうです。」

## Information

### 「昭和のあそび」

ミュージアム・サポーターズクラブ主催  
「体験！昭和のあそび～春編～」

〔日 時〕 令和8年5月5日(火・祝)

オリジナルのミニこいのぼりやかざぐるまを作ったほか、こま回しや竹とんぼなど昭和のあそびの体験を行いました。



◀ミニこいのぼりを作る様子

### 「ふく歴ミュージアムトーク」

専門分野の異なる各学芸員・文化財調査員が常設の展示資料を中心に行う約30分間のフリートーク

〔日 時〕 令和8年5月17日(日)

〔講 師〕 川越光洋(当館副館長(調査研究))

新企画の第1回は考古・文化財科学を専門とする川越副館長が行いました。

ふく歴ミュージアムトークの様子▶



## 令和8年7月～8月の催し物案内

### ■「ふく歴ミュージアムトーク」

〔日 時〕 令和8年7月19日(日)

〔講 師〕 酒井健治(当館文化財調査員)

新企画の第2回は、古代史を専門とする酒井文化財調査員が担当します。

### ■特別展開連講座

〔講 師〕 橋本紘希(当館学芸員)

特別展「福井の昭和「百年」史」期間中に開催予定です。

※その他、外部講師を招いての記念講演会なども予定しております。詳細は公式ホームページなどをご覧ください。

[編集・発行]

福井県立歴史博物館

〒910-0016 福井市大宮2-19-15 TEL.0776-22-4675(代)  
<https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/>



ふく歴ミュージアム  
No.73 令和8年6月29日発行